

ミャンマーの今 ～ヤンゴン・ネピドー訪問から～

シンガポール事務所

クリアシンガポール事務所では 2012 年 10 月に現地での情報収集等のため、ミャンマーのヤンゴンとネピドーを訪問しました。ミャンマーの概況については[自治体国際化フォーラム 2012 年 12 月号の「海外事務所だより」](#)で紹介していますので、今回は現地で見聞きしたことを中心に紹介します。

日本の支援への期待

ミャンマー政府は 2015 年の ASEAN 経済統合、総選挙に向けて、国民が生活の改善を実現できるような政策の実現、また諸外国から評価される政策の実現に意欲的に取り組んでいます。予測されていたよりも早いスピードで市場開放など各種の政策が実施されているようです。現段階では、日本からは ODA 援助によるインフラ整備関連の建設分野・建設機器分野等が多く進出しています。今後、縫製等をはじめとする製造業の進出が期待されるようです。



ロンジー姿の市民が行き交う
ヤンゴンの街角

テインセイン大統領が 4 月に訪日した際に、①国民の基礎的生活の向上に向けての支援、②経済・社会を支える人材の能力向上と制度の整備に向けての支援、③経済成長に必要なインフラ整備に向けての支援を日本による支援の 3 つの柱とすることに合意しています。

都市開発計画を初めとする各政策の策定において日本政府が協力して進めていく予定とされており、日本への期待も依然として高いようです。上下水道や廃棄物処理などの分野へのニーズも高く、これらの分野における日本の自治体の技術支援にも可能性があります。特に近年、自治体が積極的に取り組んでいる上下水道の分野では、既にいくつかの自治体がヤンゴン等への都市の視察や人材の派遣等を行っています。

アジア有数の農業国！

今回、ミャンマー内務省訪問のため、ヤンゴン・ネピドー間（約 300 キロ）をおよそ 5 時間かけて移動しました。この 5 時間の移動中に見えるものと言えば、途切れることのない水田と緑に覆われた山です。牧歌的な風景は里山風景に慣れ親しんだ日本人にとって親しみを感じるものです。

ミャンマーはアジアでも有数の農業国。第二次世界大戦前は他国に米を輸出している豊かな国でした。現在、GDP に占める農林水産業の割合は 31.9% (2009



郊外に広がる水田風景

～2010 年) と減少傾向にはあるものの依然として高く、経済活動人口に占める農業従事者の割合も 50%を超えています。日本の 1.8 倍の国土は、気候にも水にも恵まれた豊かな土地で、米や豆類など幅広い農業生産が行われています。ミャンマーの農林水産業では現在、灌漑施設の整備や機械化などによる生産性の向上が喫緊の課題とされています。そのため、日本の自治体がこれまで培ってきた一次産業におけるノウハウやスキルを活用できる場も多いものと考えられます。

ミャンマーの地方行政

ミャンマーでは 2011 年の民政移管後、民主政権による新たな国づくりが進められています。地方自治体から見ると、ミャンマーの地方行政制度についても関心が高いのではないのでしょうか。

現在、ミャンマーでは中央集権による行政が行われています。国は大きく 7 つの地域と 7 つの州に分けられています。各地域・州の知事は選挙にはよらず、地方議会の承認を得て大統領の指名により、決定されます。ですので、知事も国民に対して責任を負うのではなく、大統領に対して責任を負うとされています。なお、各町レベルでの行政の実施主体として開発委員会が設置されており、各都市の開発計画の策定、税の徴収、住民の生活向上プログラムの実施、インフラ整備等の事業を実施しています。また、公務員の選抜・採用はすべて CSSTB (Civil Services Selection and Training Board : 公務員選抜訓練機構) により行われています。

内務省によると、現在は基本的には中央集権による行政が行われていますが、ゆくゆくは地方への分権を進めていく方向にあるとのこと。今は民主化後の国づくりが始まったばかりで、地方の制度づくりについても時間をかけて進めていくことが必要という認識のようです。

生活の中の仏教の教え

最後に、ミャンマーでいかに仏教の教えが大切にされているか紹介したいと思います。ミャンマーでは国民の 90%が仏教を篤く信仰しています。町のいたるところにパゴダ(仏塔)が設置され、一日中多くの人を訪れるほか、朝になると、えんじ色の僧衣をまとった僧侶たちが鉄鉢を抱えて各家庭に托鉢に回ります。どんな家庭でも、自分たちが食べるよりも先に寄進を行うことが当たり前です。また、経済的な理由から就学困難な子供たちのために、僧院での教育も行われているなど、生活の多くに仏教との接点があるようです。

仏教が深く生活に根付いた国であることも背景に、しつけが行き届いており、国民の民



ヤンゴン市開発委員会庁舎



シュエダゴンパゴダ 観光客に混じってお祈りする信者

度が高いということもミャンマーが注目されている要因の一つです。また今回の訪問で接したミャンマー人は総じて穏やかで、日本人との親和性が高いように感じました。

終わりに

地方自治体にとってはまだミャンマーは遠い国なのかもしれませんが、昨今の急速な発展の状況を目の当たりにすると、今後の交流や関係性の発展に非常に期待が持てる国の一つであると言えます。

クレアシンガポール事務所では引き続きミャンマーの状況に注目しながら、タイムリーな情報を自治体の皆さんにお知らせしていきたいと思えます。

(参考)

自治体国際化フォーラム 2012 年 12 月号

「海外事務所だより『ミャンマー概況 ー世界の視線を惹きつけるフロンティア』」

http://www.clair.or.jp/j/forum/forum/pdf_278/05_kaigai01.pdf

(吉本所長補佐 鹿児島県派遣)

